



後記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/8057

後 記

A Postscript by the Editor

「心を込めて、ゆき届いて、適切なことを、責任をもって、あきらめないで、親御さんの痛みを自分のこととして。いつもそう思うのです。」河島淳子先生の言葉です。はるかに及ばない自分を感じますが、この言葉に一步一步近づくよう努めたいと念じます。

今年もまた大変充実し、学ぶことの多い年でした。特殊教育特別専攻科（情緒障害教育専攻）の教育研究活動は、非常に多くの学外の方々のご指導、ご援助によって成り立っています。講師の諸先生をはじめ、実習・実地指導受け入れ校の先生方には実践に根ざした講義、実習指導をいただきました。研究活動では本年もまた、多くの共同研究を行うことができました。ご指導、ご援助下さいました、大有小学校、近文小学校、北星中学校、旭川養護学校、みどり学園の先生方、旭川アルム共同作業所の先生・職員の方、お子様方と親御様方、実態調査に御協力下さった、小中学校の先生方に厚く御礼申し上げます。

私たちは、教育の現場主義ともいえるべき基本的考え方をもっています。すなわち、子どもに学び、現場に学ぶことを第1にすることです。地域の方々のご協力なしに運営は不可能なのです。

さて、少々長くなるかもしれませんが、本紀要論文の紹介をさせて下さい。

最初の佐藤満雄氏の「東川養護学校におけるインフォームドコンセントを導入した個別教育計画」は養護学校において先進的に、個別教育計画(IEP)のもつ積極的な側面、とくに親の参加と合意(インフォームドコンセント)を導入された実践を報告いただきました。文部省、あるいは教育委員会から下ろされた教育計画ではなく、学校現場教職員が作り上げた教育計画である点、親御さんから高い評価を得ている点が強調されるべきところです。

石黒一次氏は「教育と感情交流」において、学級経営における成否の8割方は担任と子ども達との感情交流の如何によると述べられています。非常に重要な主張と思えます。気持ちの通じ合いとも言うのかもしれませんが。ここで英文タイトルに、affective contact をつけました。カナーの1943年最初の自閉症児論文「Autistic disturbances of affective contact 情動的交流の自閉的障害」からとりました。担任と子どもとの感情交流とカナーのいう情動的交流には、交流するに必要な感受性を求められているところに共通性を感じます。今の子どもも自閉症児も担任や他の人たちの敏感な感受性を求めているように感じます。「教育は人なり」で結ばれています。

村田昌俊氏の「登校拒否と私」、半澤真司氏・北島裕二氏の「遊びから学びへ」一子どもたちからの出発一、五十嵐百合子氏の「T君のこと(2)」、大谷裕香里先生の「『ひきこもり』について」の4編は、対象児が登校拒否児、通常学級児、思春期青年期自閉症児と違っています。しかし、共通に流れている精神が、子どもを中心においていること、通常の常識を押しつけていないこと、むしろ、通常のあり方、あるいは私たち自身のあり方、感性・感受性について、静かにしかし、強

く問い直し、反省を迫っていると思えます。

神田英治氏の「盲学校における早期教育相談の現状と課題—機関連携に基づく地域支援のための教育相談ネットワーク確立の試み—」において、その成果は教育相談に來られている方々の人数に現れています。特殊教育諸学校の特殊教育センター的機能を見事に果たしている事例です。

鷹合 勇氏らの「小・中学校普通学級におけるLD児や特別な教育的配慮を必要とする子どもたちの実態調査 1998」は、8年前の津川信之・御幸保宏氏方の研究結果との比較を目指しましたが、数字の上では顕著な違いはありませんでした。しかし、現場での生々しい苦勞の様子が自由記述のなかから読みとれました。

中保 仁氏から、矢口少子、谷川 忍、粥川一成氏に至る4論文は、旭川市立大有小学校松かさ学級と教育大学障害児教育研究室、長 和彦氏との共同研究によるものです。本共同研究も4年目を迎え、いわゆる情緒障害児のいる知的障害特殊学級での、集団指導と個別指導および家庭との連携を含む学級経営の一つのモデルが示されました。矢口・谷川・粥川論文では、構造化の意義を追認すると同時に、ここでも、感情的交流・情動的交流、自尊心を認め、ほめることの大切さが再認識されました。

続く5編は、特殊教育特別専攻科生と特殊学級、養護学校、あるいは親御さんとの共同研究です。中川原文香氏は旭川市立北星中学校知的障害学級との共同研究で、スケジュールの構造化による顕著な行動変容の事例を報告しました。熊谷由美子氏のケースは、2年前に特専16期生の金子 裕氏が松かさ学級において、やはりスケジュールの構造化で成果を上げたお子さんで、文字学習に取り組んだものです。川辺亜衣氏はみどり学園での共同研究で、自閉的行動特徴の消失した事例を報告しました。これら3編はいずれもTEACCHプログラムの手法で成果を上げたと思われる事例です。

富澤泰子氏は、家庭教育者としての親の、非常に学ぶことの多い実践例を報告しました。

盛岡淳美氏は、旭川養護学校訪問部との共同研究として、在宅訪問教育のもつ教育のもっとも原点的営みが報告されました。

次の5編は、音楽と運動に関するものです。昨年に続いて大坂克之氏のミュージック・ムーブメント、双子の事例ですが、家族ぐるみの音楽が報告されました。大坂先生の影響を受けた古川は旭川に音楽運動療法を導入すべく、毎月のセミナーを開催し実際にその技法を学んでいる寺田真澄氏のグループに参加して学習しています。「喜びを音楽とともに」はそのまとめです。

長谷川康弘氏は、旭川アルム共同作業所との共同研究として、同作業所の乗馬活動について報告しています。重度知的障害者が乗馬といういわば得難い遊びを楽しんでいることに、非常な豊かさを感じます。荻野ひとみ氏は、障害児へのボールエクササイズの実践事例を報告しています。音楽運動療法と乗馬のもつ上下運動の楽しみをもっとも簡便に楽しめるのがボールです。林 伸恭氏は上下運動を含め、感覚統合的遊びをともに楽しむことをとおして、自発的行動を引き出しています。

小田切 正氏は菅 季治論、その5において、まるで今そのものを論じているように見えます。戦争中の抑圧的社会環境と現在の管理的教育環境になにか共通性があり、今をどう生きるかを問い直しているように思います。

古川の一文は、本紀要の「全額、投稿者負担とするもの」に応募したものです。実践論文でも、エッセイでも、自信はないけれども書いておきたいものがあります。そんなときこの応募条件で投

稿します。5年～10年、書き続ければ、もう少し確かな論文にまとまるように思います。

また、紀要の創刊号から18号まで見て参りますと、少しずつ方向性が見えてきたように感じています。いろいろな方法のいいところをどんどん学ぶということです。現場主義は一つの方法論のみにては対応できません。さらに、実践を通して、かかわり手の感性、感受性が深まっていかなければならないということです。はるか長い道のりとはいえ、かかわり手の人格の成長も問われるということです。また、教育は地域社会が核になるのではないのでしょうか。18号に特徴的なことは、子ども主体と遊びの尊重とも感じました。

1月は特殊教育特別専攻科生にとって地獄の季節です。自分の論文を紀要原稿にまとめ、ワープロに打ち、一太郎に変換し、体裁を整えます。さらにそれだけに止まらず、投稿して下さった貴重な論文を製版用原稿に整え、校正し、最終原稿を印刷所に渡す、これを特専科生全員です。その尽力に、心から感謝いたします。

1999年2月4日 立春

古川 宇一 (Uichi Furukawa)

特殊教育特別専攻科第7期 (情緒課程18期)

鷹 合 勇
粥 川 一 成
川 辺 亜 衣
熊 谷 由美子
谷 川 忍
富 沢 泰 子
中川原 文 香
長谷川 康 弘
林 伸 恭
盛 岡 淳 美
矢 口 少 子

北海道教育大学旭川校
障害児教育研究室
主任 古川 宇一
内島 貞雄
末岡 一伯
若原 直樹

英文題名校閲
Beaty Shawn
(Advisor on English Titling)